慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	音楽鑑賞と知覚のマルチモダリティ
Sub Title	Music appreciation and the multi-modality of perception
Author	源河, 亨(Genka, Toru)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2015
Jtitle	哲學 No.134 (2015. 3) ,p.89- 100
JaLC DOI	
Abstract	Almost all aesthetic experiences involve perceptual experiences. For example, appreciating a picture involves seeing its colors and shapes, and appreciating a musical work involves listening to its tones and pitches. Thus, it is not surprising to believe that considerations of the nature of perceptual experience will facilitate considerations of the nature of aesthetic experience. In this study, I focus on music appreciation. I argue that the consideration of the multi-modality of perception supports not only the "thick view" on appreciation but also the formalistic distinction between "live" and "recorded" music.
Notes	特集：西脇与作君・ 樽井正義君退職記念 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000134-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

音楽鑑賞と知覚のマルチモダリティ

源　河　　亨*

Music Appreciation and the Multi-modality of Perception

Tohru Genka

Almost all aesthetic experiences involve perceptual experiences. For example, appreciating a picture involves seeing its colors and shapes, and appreciating a musical work involves listening to its tones and pitches. Thus, it is not surprising to believe that considerations of the nature of perceptual experience will facilitate considerations of the nature of aesthetic experience. In this study, I focus on music appreciation. I argue that the consideration of the multi-modality of perception supports not only the “thick view” on appreciation but also the formalistic distinction between “live” and “recorded” music.

* 慶應義塾大学文学研究科哲学専攻博士課程

1　はじめに

たいていの美的経験には知覚が関わっている．たとえば，絵画を鑑賞するときにはその色や形を見ているし，音楽を鑑賞するときにはその音色やピッチを聞いている．もし作品がもつ色や音色を知覚しなければ，その作品を美的に判断することは不可能であるようにも思われる．そうであるなら，美的経験や鑑賞経験を考察するうえで，知覚についての考察が有用であったり，新たな視点をもたらしてくれたりすると考えてもおかしくない．その一例として本稿は，知覚の観点から音楽鑑賞のあり方を考えてみたい．

音楽は音を使った芸術である．そのため，音楽作品を適切に鑑賞するためには，その作品を構成する音を注意深く知覚することが必要だと考えられる[1]．だが，そもそも音とはどういうものなのだろか．われわれは学校教育で音は音波だと教えられてきたが，近年の知覚の哲学ではそれに反対する見解が提出されている．その見解によれば，音は音波ではなく，音波を生み出す物体の振動である．

もし音が物体の振動だとすると，われわれの音楽鑑賞がどうあるべきかについての見解にも影響が出てくるだろう．とくに本稿は，こうした立場から，音楽鑑賞についての「厚い鑑賞観（thick view）」が支持されると論じ，さらに，音楽について「ライヴ音楽」と「レコード音楽」の形式的区別が支持されると論じる．そのうえで鍵となるのは，知覚の**マルチモダリティ**（複数の感覚モダリティでの知覚）である．

本稿の構成を述べておこう．2節では，知覚のマルチモダリティという観点から音は物体の振動であるという考えが支持されることを説明する．3節では，音楽作品がマルチモーダルに鑑賞されうるということから，音楽鑑賞には聴覚的でない特徴も重要だという厚い鑑賞観が支持されると論じる．4節では，マルチモーダルな鑑賞が可能なライヴ音楽と，マルチモーダルな鑑賞が不可能であるレコード音楽とでは，適切な鑑賞法が異な

ると論じる．

2　音の存在論と知覚のマルチモダリティ

音は物体の振動であるという見解は「遠位出来事説（located event theory）」と呼ばれる（Casati and Dokic 2005）．それによれば，われわれが音を聞くとき，音は振動する物体から鼓膜のところ（近位）に移動してくるものではなく，知覚者から離れた振動する物体のところ（遠位）にとどまっている（というか，そもそも両者は同一である）．この見解によれば，音波は物体の振動についての情報を運ぶ媒体であるが，それ自体は聞こえるものではない．われわれが聞いているのは，音波によって運ばれている情報の中身，つまり物体の振動である[2]．それはちょうど，物体から反射されて目に到達する光は物体についての情報を運んでいるが，それ自体は見えるものではないのと同じである．音波や反射光といった刺激は，その刺激を生み出した原因（物体や物体の振動）についての情報を運んでおり，それを受け取ることによって原因への意識的なアクセスが可能になるものだと考えられるのである[3]．

遠位出来事説を支持する議論はいくつかあるが[4]，本稿では，知覚の「マルチモダリティ」からの議論をみてみよう（O'Callaghan 2008）[5]．

マルチモダリティとは，視覚や聴覚といったそれぞれの感覚モダリティはそれぞれ独立に対象を捉えているのではなく，共同して同一の対象を捉えているという考えである．このことを理解するためには，多感覚錯覚（cross-modal illusion）と呼ばれる現象をみてみるのがよいだろう．その有名なものとしては「腹話術効果（ventriloquist effect）」が挙げられる．腹話術を見るとき，われわれは，腹話術師が声を出していると知っているが，声は人形の口から発せられているように聞こえる．もちろん目を閉じていれば声は腹話術師の方に定位するのだが，視覚刺激の影響によって，聴覚的知覚が修正されるのである[6]．逆に，聴覚が視覚に影響をもたらす

事例としては，「音によるフラッシュ錯視（sound-induced flush illusion）」と呼ばれるものがある．これは，一つの光のフラッシュを見るときに短いブザー音を複数回聞かせると，複数回フラッシュしたように見えるというものである．聴覚刺激を提示することによって，視覚的意識のあり方が変化するのである[7]．

こうした多感覚錯覚は**情報の調整**という観点から説明される．通常，視覚は聴覚よりも空間分解能が優れており，対象がどこに存在しているかについては，聴覚よりも視覚の方が信頼できる．そのため，視覚から得られる空間的情報と聴覚から得られる空間的情報が食い違っている腹話術の場合，より信頼できる視覚情報が優先されることで聴覚的知覚が修正され，声は人形の口に定位するのである．他方で，聴覚は視覚よりも時間分解能が優れており，出来事が何回生じたかについては視覚よりも聴覚の方が信頼できる．視覚情報と聴覚情報が食い違っている音によるフラッシュ錯視の場合，より信頼できる聴覚情報が優先されることで視覚情報が修正され，フラッシュが複数回生じたように知覚されるのである．

多感覚錯覚をこのように説明するうえで重要なのは，それぞれのモダリティは互いに独立に対象を捉えているのではなく，それぞれが共同して同一の対象を捉えているという考えである．というのも，それぞれのモダリティが別々のものを捉えているなら，そこから得られる情報を調整する必要はないからだ[8]．多感覚錯覚においては，視覚的対象と聴覚的対象がそれぞれ独立に同時に意識に現れているのではなく，同一の対象が視覚的にも聴覚的にも意識に現れていると考えられるのである．

腹話術効果や音によるフラッシュ錯視は錯覚であるが，これらの事例は正しい知覚がもつ特徴を際立たせている．つまり，正しい知覚の場合でも，同じ対象を知覚したそれぞれのモダリティは，互いに情報を調整していると考えられるのである[9]．

この点を考慮するなら，聴覚の対象である音は，視覚によっても捉えら

れるものであることが示唆される．そうであるなら，われわれが聞いている音は，耳によってしか捉えられない音波ではなく，視覚の対象にもなりうるような物体の振動だと考えられるのである[10]．

3　マルチモダリティと厚い鑑賞観

音が複数のモダリティで捉えられる物体の振動であるとすると，音楽鑑賞はどのようになされるべきかについての見解にも影響が出てくる．その一つとして，冒頭で述べたように，遠位出来事説は「厚い鑑賞観」を支持することを説明しよう．

厚い鑑賞観とは，演奏者のパフォーマンスといったそれ自体は本質的に聴覚的ではないような特徴も音楽鑑賞にとって重要だという考えである．それに対して「薄い鑑賞観」では，音楽鑑賞にとっては（聴覚のみのユニモーダルな対象としての）音だけが重要であると考えられる（van Gerwen 2012）[11]．厚い鑑賞観を支持する理由としては，音楽作品がどのようであるかは，演奏者がどのような楽器を使用し，どのような技術をもち，どのような仕方でパフォーマンスするかに依存している，ということが挙げられる．

マルチモダリティが厚い鑑賞観を支持するのは，音楽鑑賞の場面でもマルチモーダルな知覚がみられるからである．たとえば，演奏者の動きを見ることによって曲の一部（曲の拍子やダイナミックさなど）がより強調されて聞こえすると言われている（Nanay 2012）．こうした事例が示しているのは，マルチモーダルな知覚システムは音楽鑑賞に際して，視覚と聴覚で得られた情報を調整しているということである．つまり，知覚システムが音としてまとめているものには，演奏者のパフォーマンスに関する視覚的特徴も含まれているのである．

マルチモーダルという観点からすると，視覚によって捉えられる情報は，音楽知覚にとって付帯的な（切り離せる）ものではなく，意識的なレ

ベルで不可分なものになっていると考えらえる．というのも，それぞれのモダリティが得ている情報は意識下で調整され，意識にのぼる段階では混ざりあっているからである．ユニモーダルに聴覚だけで捉えられて意識に現れる音楽作品と，マルチモーダルに捉えられて意識に現れる音楽作品は，聴覚的性質が類似してはいるが，異なる対象なのである．ユニモーダルに捉えられた対象は，マルチモーダルに捉えられた対象の一部ではないのだ．

知覚のマルチモダリティが厚い鑑賞観を支持するということは，音楽作品がもつ美的性質の観点から考えるとよりわかりやすいかもしれない．「ダイナミックである」「優美である」「優雅である」「けばけばしい」といった美的性質は，色や形といったそれ自体は美的でない可感的性質の集まりに存在論的に依存する性質だと言われている[12]．この見解は，たとえば，優美だと言われる絵画の一部の色や形を変えてしまうと，その絵が台無しになり，もはや優美ではなくなってしまうかもしれないということを考えると理解できるだろう．ここから，可感的性質は美的性質よりも基礎的なものであり，可感的性質が特定の仕方で組み合わさることにより，美的性質が実現されると考えらえるのである．

また，美的性質を知覚するためには，それの基礎となっている非美的性質をすべて正しく知覚する必要があると考えられる．たとえば，不注意のために絵の一部を見落としてしまっては，その絵について正しい美的判断を下すことはできないだろう．

この点は音楽鑑賞にも当てはまるだろう．つまり，演奏された音楽作品がもつ美的性質を適切に捉えるためには，それがもつ非美的特徴をすべて正しく捉えなければならないと考えらえるのである．そして，もし音楽鑑賞においてマルチモーダルな知覚が成立しているなら，音楽作品の美的性質の基礎には，音色やピッチといった聴覚的な性質だけでなく，パフォーマンスがもつ視覚的特徴も含まれると考えることができる[13]．そうだとす

ると，視覚的特徴を見落として下した音楽作品についての美的判断は，絵の一部を見落として下された美的判断と同じく，作品がもつ美的性質を捉えそこなっていると考えられるのである．そうであるなら，聴覚的特徴のみのユニモーダルな知覚に基づいた鑑賞（薄い鑑賞）は，作品がもつ美的性質を捉え損ねてしまう誤った鑑賞法だということになるだろう．

これまでみてきたように，マルチモーダルな知覚から示唆される音の存在論を考慮すると，音楽鑑賞についての厚い鑑賞観が支持される．音楽を鑑賞するうえでは聴覚的要素にだけに注意すべきか聴覚的でない要素も重要であるかという厚い鑑賞観と薄い鑑賞観の対立について，マルチモーダル知覚は，音の存在論という知覚の哲学の観点から，（そして，哲学的観点の根拠となっている「モダリティ間の情報の調整」という心理学的観点から）厚い鑑賞観を支持するのである．もしこの考えを否定したいならば，音楽鑑賞には知覚よりも大事な要因があり，その要因はマルチモーダル知覚を否定するものであるということを示さなければならないだろう．

明示的に述べていなかったが，ここまで検討してきたのは生演奏を鑑賞している場面である．つまり，演奏される音楽作品について聴覚的にも視覚的にもアクセスが可能な場面だけを念頭に置いていたのである．最後に，生演奏される音楽作品と録音・再生された音楽作品については少々事情が異なることを説明しておこう．

4　ライヴ音楽とレコード音楽

前節ではマルチモーダルな知覚から厚い鑑賞が支持されると述べたが，もしすべての音楽鑑賞は厚い鑑賞でなければならないなら，再生された音楽は**必ず**不完全にしか鑑賞されていないことになってしまうだろう．というのも，再生された音楽を聞く場合，演奏者のパフォーマンスをマルチモーダルに知覚することはできず，必ず聴覚のみのユニモーダルな知覚にしかならないからである．

だが，この考えはあまりもっともらしくないように思われる．というのも，再生された音楽を聞く場合，われわれはそれを不完全な鑑賞だとはみなしていないし，また，録音・再生される音楽は鑑賞者が聴覚だけでユニモーダルに知覚することを念頭に作成されているからである．そうであるなら，音楽鑑賞はすべて厚い鑑賞でなければならないという考えは，録音物の音楽制作・鑑賞の実践に反していることになってしまう．

この結論を避ける一つの方法は，谷口（2010）が主張しているように「ライヴ音楽」と「レコード音楽」が異なる形式の芸術であることを認めることである．谷口によれば，その場で演奏されるライヴ音楽と録音物として制作されるレコード音楽は，演劇と映画がそうであるように，異なる形式の芸術である．カメラワークやカット編集といった技術が駆使される映画とそうしたものが使われない演劇とでは，同じ原作に基づく場合でも，異なるジャンルの芸術であることが問題なく認められている．そうであるなら，さまざまな録音技術が駆使されたレコード音楽とそれらが使われていないライヴ音楽も異なる形式の芸術だと考えることができるだろう．

ライヴ音楽とレコード音楽が異なる形式の芸術作品であるなら，ライヴ音楽には厚い鑑賞が適切であるがレコード音楽にはそうではないと主張する余地が出てくる．というのも，芸術作品の形式の違いに応じて適切な鑑賞法が異なると考えることは不思議ではないからである．たとえば，映画と演劇とでは適切な鑑賞法が異なっていると主張してもそれほどおかしくはない．前節までに考察してきたマルチモーダル知覚によって支持される厚い鑑賞観は，ライヴ音源という形式の芸術にあてはまるものだと言えるのである．

また，本稿で考察してきたマルチモーダルな鑑賞は，ライヴ音楽とレコード音楽が異なる形式の芸術作品であるという考えを支持する新しい哲学的ないし心理学的根拠を与えることにもなるだろう．谷口はレコード音

楽とライヴ音楽の区別を主張するうえで，それぞれの鑑賞では経験のモードが異なることを指摘している．その例として，レコード音楽を聞いたときに経験される空間性（たとえば，演奏者と鑑賞者の距離）はライヴ音楽の経験とは異なり独自のあり方をしていることが挙げられている．だが，本稿で考察してきたマルチモーダル／ユニモーダルの区別も，空間性とは別の観点からこうしたモードの違いを支持すると考えられる．ライヴ音楽にはマルチモーダルな知覚が可能であるが，レコード音源にはユニモーダルな知覚しか可能ではない．両者において演奏されている（タイプとしての）音楽作品は同じものであっても，知覚のあり方が大きく異なっているのである．

5　おわりに

近年，知覚の哲学は盛り上がりを見せており，さまざまな考察が矢継ぎ早に提出されている．そうした考察はさまざまな分野に応用しうるものだと思われるが，その一例は本稿で示した通り美学である．実際に，知覚の哲学の知見を利用して美学の問題を解決しようとする試みも少しずつではあるが増えつつある．知覚が関わる美学的問題は本稿で扱ってきた音楽鑑賞に限られないが，知覚の哲学の考察はそうしたさまざまな問題を扱う手がかりを与えてくれるかもしれない．たいていの美的経験に知覚が関わっているのだから，そう考えることは何の不思議でもない[14]．

註

[1] 本稿では，実際に知覚されるトークンとしての音楽作品について検討し，タイプとしての音楽作品については扱わない．というのも，通常，知覚できるのは環境に存在している具体的なトークンとしての個物であり，タイプのような抽象的存在者は知覚できるものではないと考えられているからである．タイプ的な存在者の知覚可能性を主張することもできなくはないかもしれないが，それに関する議論は本稿の目的から大きく逸れてしまう．

[2] 音波も媒質の振動であり，物体の振動と同じ種類の振動という出来事であるが，両者は因果関係の関係項として形而上学的に区別される．たとえば，ボールがぶつかるという原因とそれによってガラスが割れるという結果は異なる出来事であるように，物体が振動するという出来事とそれによって媒質が振動させられるという出来事は異なるものだと考えられるのである．

[3] 音はしばしば色や味とともに二次性質に分類されるが，この見解によれば音は性質ではなく，音量・音高・音色という性質をもつ個物，それも出来事である．この考えは，音はその性質が変化しても存在し続けることや，音は始まりと終わりをもち一定期間持続するものであることから支持される．

[4] 以下で説明するもの以外にも，現象的意識の観点からの議論がある（Casati and Dokic 2005）．もし音が音波であるなら，音は振動する物体から知覚者の方に移動してくるものであるが，音は（音源が移動しないかぎり）移動しているようには聞こえない．むしろ，音は音源のところにあるように聞こえる．もし音が音波だとすると，音は実際には移動しているものであるのに移動しているようには聞こえないという点で，聴覚経験はすべて誤っているということになる．だが，聴覚経験がすべて誤っているという錯誤説（error theory）は信じがたい．そうであるなら，聴覚経験が示している通り，音は振動する物体のところに存在すると考えるのが好ましい．

[5] Casati and Dokic（2005）と O'Callaghan（2007, 2008）はどちらも遠位出来事説に分類されるが，立場が微妙に異なる．前者は音と物体の振動という出来事を同一視するが，後者によれば，音は，物体の振動がまわりの媒質をかき乱す（disturbing）という出来事である．前者の場合，媒質がない状況（たとえば真空中）でも物体が振動すれば音がしていることになるが，後者では媒質がない状況では音は存在しないことになる（媒質がなければ媒質のかき乱しもない）．本稿ではより単純な前者を採用するが，以下で説明する O' Callaghan（2008）の議論は Casati and Dokic のバージョンでも利用することができる．

[6] Bertelson（1999）.

[7] Shames et al.（2000）.

[8] あまりにもタイミングがずれている視覚情報と聴覚情報は，同一の対象についてのものとして調整されないだろう．おおよそタイミングが一致している視覚刺激と聴覚刺激は，同一の対象によって生み出された可能性が高く，そのためそれらの刺激が担う情報が調整されると言える．

[9] マルチモーダルな知覚は他のモダリティにもみられる．たとえば，視覚と触覚のあいだの多感覚錯覚としては，ラバーハンド錯覚（Botvinick and Cohen

1998）が，聴覚と触覚のあいだの多感覚錯覚としては羊皮紙錯覚（Jousmäki and Hari 1998）が挙げられる．また，われわれが通常経験している味覚と嗅覚には明らかに相互作用がある（フィッシュ 2014, p. 237）．

[10] もちろん，物体の振動は触覚の対象にもなりうるものである．

[11] van Gerwen は薄い鑑賞を支持する論者として Scruton を挙げている．Scruton は遠位出来事説に反対し，音は物体の振動とは別の（それどころか物理的環境から切り離された）純粋な出来事であるという「純粋出来事説（pure event theory）」を主張している（Scruton 1999; 2009）．

[12] こうした考えは Sibley（1959, 1965）に基づく．美的性質と非美的性質を分ける基準として，非美的性質を知覚するためには通常の知覚能力があれば十分であるが，美的性質を知覚するためには趣味や感受性の行使が必要だということが挙げられる．ここでの趣味や感受性は，個人的な好みではなく，美的性質に気づくための能力であり，作品を多く経験したり有能な批評家から教えられたりするといった学習を通して身につくものだと言われている．美的性質の知覚可能性については源河（forthcoming）を参照．

[13] 轟音でパフォーマンスするジャンルの音楽（ノイズやシューゲイザーなど）では，肌で感じられる震え（触覚的特徴）も美的判断にとって重要だと考えられる．

[14] 本稿は，立命館大学先端総合研究科「分析哲学と芸術」研究会 2014 年度公開研究会「音／サウンド研究の現在」における講演に基づいている．

文献

Bertelson, P.（1999）“Ventriloquism: A Case of Cross-modal Perceptual Grouping”, in G. Aschersleben, T. Bachmann, and J. Müsseler（eds）, *Cognitive Contributions to the Perception of Spatial and Temporal Events*, Amsterdam: Elsevier, 347–62.

Botvinick, M. and Cohen, J.（1998）“Rubber hands “feel” touch that eyes see”, *Nature* 391: 756.

Casati, R. and Dokic, J.（2005）“Sounds”, *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*（Fall 2014 Edition）, Edward N. Zalta（ed.）, URL =＜ http://plato.stanford.edu/archives/fall2014/entries/sounds/＞.

Jousmäki, V. and Hari, R.（1998）“Parchment-skin Illusion: Sound-biased Touch”, *Curr Biol* 8: 190.

Nanay, B.（2012）“The Multimodal Experience of Art”, *British Journal of*

Aesthetics 52(4): 353–363.
O'Callaghan, C. (2007) *Sounds*, Oxford University Press.
———— (2008) "Seeing What You Hear: Cross-Modal Illusions and Perception", *Philosophical Issues* 18(1): 316–338.
Scruton, R.(1999) *The Aesthetics of Music*, Oxford University Press.
———— (2009) *Understanding Music*, Continuum.
Sibley, F. (1959). "Aesthetic Concepts", *Philosophical Review* 68(4): 421–450.
———— (1965) "Aesthetic and Nonaesthetic", *Philosophical Review* 74(2): 135–59.
Shams, L., Kamitani, Y. and Shimojo, S. (2000) "What You See Is What You Hear", *Nature* 408: 788.
van Gerwen, R. (2012) "Hearing Musicians Making Music: A Critique of Roger Scruton on Acousmatic Experience", *The Journal of Aesthetics and Art Criticism* 70(2): 223–230.
源河亨（forthcoming）「美的性質と知覚的証明」,『科学哲学』.
谷口文和（2010）「レコード音楽のもたらす空間—音のメディア表現論」,『RATIO: special issue 思想としての音楽』, 講談社, 240–265.
フィッシュ, ウィリアム（2014）『知覚の哲学入門』, 山田圭一監訳, 勁草書房.